

【報 告】

探討移動中的「日本」 ——從和製漢語到台灣所使用的日本借用語——

林寄雯

淡江大學日本語文學系副教授

主旨

翻譯語的魅力在於「翻譯語是提供新知識的一種難懂又看似高級」的語言。魯迅揭示「硬譯」這樣的翻譯方法，藉由採用原文的表達，來豐富中文的語彙。此外，谷崎潤一郎提到漢語是外語，「漢語比純粹的大和語言，更易感受外國情趣，無形中表現出高級」（文章讀本）。谷崎潤一郎說明了明治初年，日本在受到西歐語言這些異質語系的衝擊時，所面臨的實情。

這次研討會的主題為移動中的「日本」，筆者個人將探討的方向，集中在日語以及日本文化融入的過程。這個過程是目標文化藉由異質的文本來使語言更加豐富的過程。

本論文將就日本創造的和製漢語反向輸入中國，還有近年來台灣大量借用日語的現象進行考察。當今，多文化溝通能力的啟發備受矚目，漢字是台灣、日本還有中國大陸共同使用的文字，期望藉由翻譯讓彼此的相互理解邁向新的層樓。

關鍵詞：翻譯語 和製漢語 台語 借用語 語彙

**Researching shifting Japan from the translated words:
From Waseikango until the loanword of Japanese using in Taiwan**

Lin Chi-Wen

Associate Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

The charm of translated words is to know the difficult, high grade language newly (Yanabu Akira said). As Lo-Xun unveiled, the 「hard translation (硬訳)」 method appeals directly using original expression to enrich the Chinese vocabulary. Also, Tanizaki Junichiro expressed, when an original Chinese word compares to the pure yamato otoba(大和言葉), it is relatively easy to feel exotic, and sounds something modish (from bunshyou yomihon). He also reminisced that it is just the actual condition to face the western language, the heterogeneous language system in the early years of Meiji era.

Shifting Japan as the theme of this symposium, I will focus on the process of accepting Japanese or Japanese culture, and the process of the target culture which was enriched by the heterogeneous text.

This paper studied from waseikango(和製漢語) that made by Japan reimporting to China until the phenomenon of using Japanese abundantly in Taiwan recently. Nowadays, training of multi-culture communication ability is emphasized. Kanji as the common item, we expect the new mutual understanding of the translation around Taiwan, Japanese and main-land China.

Keywords: translated words, Waseikango, loanword, Taiwanese Hokkien, vocabulary

翻訳語から移動の中の「日本」を探る —和製漢語から台湾にある日本語からの借用語まで—

林寄雯

淡江大學日本語文學系副教授

要旨

翻訳語の魅力は「新しく知る難解な高級そうな言葉」（柳父章）であるところにある。魯迅は「硬訳」の訳し方を掲げ、原文の表現を取り入れることによって中国語の語彙を豊富にする方法を唱えた。また、谷崎潤一郎は元来外国語である漢語が「純粹の大和言葉よりはエキゾチックな感じを出し易く、何となくハイカラに聞こえる」（文章読本）と述べ、明治初年日本が西欧語といった異質の体系の言葉と直面したときの実態を述懐した。

今回のシンポジウムのテーマである移動の中の「日本」を筆者なりに日本語また日本文化を受容する過程に焦点をしぼりたいものである。目標文化が異質なテキストによって豊かになるプロセスである。

本論は日本によって作られた和製漢語の中国への逆輸入から近年台湾における日本語を多量に借用する現象までに関して考察するものである。多文化コミュニケーション能力を育むことが重要視されつつある昨今、漢字を共通項としている台湾、日本、そして中国大陸との翻訳を通しての新たな相互理解が期待される。

キーワード：翻訳語 和製漢語 台湾語 借用語 語彙

翻訳語から移動の中の「日本」を探る —和製漢語から台湾にある日本語からの借用語まで—

林寄雯

淡江大學日本語文學系副教授

1. はじめに

翻訳語の魅力は「新しく知る難解な高級そうな言葉」（柳父章）であるところにある。魯迅は「硬訳」の訳し方を掲げ、原文の表現を取り入れることによって中国語の語彙を豊富にする方法を唱えた。また、谷崎潤一郎は元来外国語である漢語が「純粹の大和言葉よりはエキゾチックな感じを出し易く、何となくハイカラに聞こえる」（文章読本）と述べ、明治初年日本が西欧語といった異質の体系の言葉と直面したときの実態を述懐した。

今回のシンポジウムのテーマである移動の中の「日本」を筆者なりに日本語また日本文化を受容する過程に焦点をしぼりたいものである。目標文化が異質なテキストによって豊かになるプロセスである。

本論は日本によって作られた和製漢語の中国への逆輸入から近年台湾における日本語を多量に借用する現象までに関して考察するものである。多文化コミュニケーション能力を育むことが重要視されつつある昨今、漢字を共通項としている台湾、日本、そして中国大陸との翻訳を通しての新たな相互理解が期待される。

2. 翻訳語の魅力

谷崎潤一郎は「文章読本」¹で日本語固有の音を大切にす大和言葉の美しさを生かすように呼びかけている一方、翻訳語を通して国語の語彙の乏しさを補う実用性を積極的に受け入れる姿勢が次の引用で窺える。

¹谷崎潤一郎 1983 『谷崎潤一郎全集』第二十一巻「文章読本」中央公論社 P117

してみれば、斯くの如き云ひ廻しも結局日本語の範囲を出ないのでありまして、唯漢文を日本語の語法に当て嵌めて読み下すために、多少無理な新奇な云ひ廻しを考へ出した、さうして最初は漢文を読み下す時にのみ使つてみたその云ひ廻しを、国文を作るのに応用をした、それが和漢混交文であります。ですから、漢文の影響で斯くの如き云ひ廻しが発明されたことは事実であります。此の云ひ廻しそのものが漢文の語法ではありません。左様に、我が国と最も近い支那の言葉ですら、千年以上も接触しながら中々同化しないのでありますから、況や関係の浅い西洋の言葉が、さう易々と取り入れられる筈はないのであります。元来、われわれの国語の欠点の一つは、言葉の数が少ないと云ふ点であります。(下線は筆者、以下同)

また、同書において谷崎潤一郎は漢字の働きを述べた。一つの文字が一つの意味を表わしている漢字は新語を造る際の最も便利な言葉である。明治以来西洋の学問や思想や文物を輸入し、技術語や学術語を翻訳するとき、漢字の便利さによって困難を感じなかったのである。

2.1 魯迅の「翻訳についての通信」

「翻訳についての通信」²（「關於翻譯的通信」1931年12月28日）は魯迅が瞿秋白の批判に対して返答した手紙である。魯迅は訳本の異様な句法を通して中国の文章の不精密といった病気を治療しようと述べている箇所をつぎに引用する。

私の答えは、それは訳本である、ということです。この訳本というものは、単に新しい内容を輸入するばかりでなく、新し

² 魯迅著・増田涉訳 1931『二心集』「翻訳についての通信」
<http://www.geocities.co.jp/Milkyway-Kaigan/9066/luxun/sakuhin/nisins hu/honyakuni.html>

い表現法をも輸入することです。中国の文章あるいは言葉は、その法則が実際あまりにも不精密です、作文の秘訣は、熟語を避けて、虚字（意味をもたない文字）を削ることで、そうすれば好い文章になります、講和の時には、いつも言葉が意（こころ）を通じてくれないのです、つまり言葉が役に立たないので、（中略）この病気を治療するためには、私はただ続けさまに苦勞をしながら、異様な句法をつめ込んで行く、古いものでも、他省や他府県のものでも、外国のものでもつめ込むより仕方がないと思います、後になれば、それが自分自身のものとなるのです。これは決して空想のことではありません。遠い例としては、たとえば日本ですが、彼らの文章には、欧化の語法が極めて当りまえのものになっています、

翻訳を通して大衆の言葉が豊富になっていく。多少ぎこちない文章を容忍することは言葉を豊富にするためのプロセスだと魯迅が考えている。魯迅は「罷工」という文字を例として取り上げた。1925年に群集のために造られた言葉であるが、手紙を書かれた時点の1931年では、みんなこの言葉の意味を理解しているということである。そして、大衆の言葉とは違った創作類の文章でも、直訳を主張している。その理由とは、「一方ではどしどし輸入すると共に、一方ではどしどし消化し、吸収し、使用できるものを伝えて行く、渣（かす）や滓（おり）はそれを過去の中にとどこおるままにしておくのです。だから現在「多少のぎこちなさ」を容忍するということは、決して「防御」とはいえないので、実はやっぱり一種の「進攻」であります。」と翻訳語の利点を捉えている。

2.2 翻訳の文体

柳父章の「翻訳で作られた近代日本語」³で翻訳論の立場から日本

³安西徹雄、井上健、小林章夫編 2005『翻訳を学ぶ人のために』世界思想社 P172-173

語の主語論争を振り返って考える。1889（明治 22）年に公布された大日本帝国憲法の文章をとりあげ、伝統的な「～ハ…」構文と帝国憲法条文の「～ハ…」文の違いを説明した。また、『吾輩は猫である』の文体は直訳な文体であり、近代以後の翻訳の結果、法律文や論文や小説に、主語が異常に多い文が続々と現れ始めたかつぎのように指摘した。

「吾輩は猫である。」とは直訳的日本語なのだ。今日では私たちはこういう文体にかなり慣れているが、漱石の時代には、きわめて直訳的で人前に出すとやや滑稽な、しかし新鮮な語感の文句だっただろう。こうして「～は…である。」文は、元来オランダ語学習から始まっていたのだが、漱石以後、日本語の書き言葉の一つの典型として定着していった。

明治 20 年代から 30 年代にかけて、翻訳を通してまたは翻訳の影響で、「である」「た」や「ル形」といった新しい文末の文が作りだされた。当時の読者たちは、こういう文末語が繰り返される文章を受け入れられなかったが、有名作家たちの書いた文体に次第に慣れていって受け入れるようになったのである。

翻訳の文体によって目新しい文体が形成された例に、村上春樹作品の台湾版中国語訳があげられる。村上春樹作品の台湾版頼明珠訳の魅力は「啊啦噢耶」といった終助詞を大量に使用するところにあると呉克希⁴は指摘した。

這時候頼譯出現了，那種時髦的語言呼應了身邊的全球化：台北變漂亮了，（中略）更浸潤的是時代精神，一切都在數位化，文明從來沒有這麼接近科幻過。網路開始和神經系統接軌，每個人都變身塚本晉也的「鐵男」，被電線港路線電磁波穿透成 WWW

⁴呉克希が 2008 年 4 月 12 日の『中國時報』人間副刊に載せた「春樹與愛玲」によったものである。

的一個節點，世界從來沒有這麼天涯若比鄰，比鄰又若天涯。虛擬空間出現了，逐漸和現實打成了一片虛實相生的 hyperreality，超現實，正是村上次元。

那些幾乎不用慣語的敘述，乍看好像字彙不夠，尤其中文向來又以老熟為美。感謝賴明珠沒把他譯成熟爛的中文！稍稍生澀的句法，大量啊啦噢耶的語助詞，有種剛剛好的透明感，很能讓人體會村上對風格的用心。（下線部筆者記：私たちが使い慣れている文章に訳さなかったことに、賴明珠女史に感謝しなければなりません。稍稍生硬な句法、終助詞の「啊啦噢耶」を多量に使う手法には、遠くもなく近くもない透明感を漂わせていて、スタイルに対する村上のこだわりを伝えてくれます。）

本来中国語は終助詞の少ない言語である。中国語では「呢、嗎、呀、啦、吧、啊、的、了、呐、哇」などといった終助詞はあるが、使用する頻度は日本語ほどではない。中国語に比べれば、日本語は終助詞が豊富で、特に会話文においては終助詞が多く使われる。吳克希が上記で指摘したように、生硬な句法と終助詞を多量に使う文体は読者にとって目新しいものである。

3. 日本語の中の漢語

日本語は中国語と深くかかわっている。『古事記』と『万葉集』が漢字で書かれた日本最初の文章であるように、仮名が生まれるまで日本語は漢字によって書かれていた。仮名が生み出された十世紀初頭以降は、表意文字である漢字と表音文字である仮名によって日本語を書くこととなった。また、漢字と仮名にははっきりとした役割分担をしている。漢字は男性優位の社会における先進文化、渡来の学問用語として使われる。仮名は日常の手紙文や和歌、小説などに用いられる。漢字は高級な意味の分野を分担している。漢語は中国語であった語が日本語に借用された語で、中国語と長く接触することによって、多くの中国語が日本語に借用されるようになる。

3.1 漢語の語彙

日本語はもともと名詞が重視されていなかった言葉である。特に抽象名詞が少なかった。その故、漢字による名詞造語が盛んに行われるようになった。『近代日本語の思想』⁵では、文化論的な面から名詞の受容を述べている。同書によれば、名詞は文の中で、文法的な働きが乏しい品詞である。西洋語では、名詞も、性、数、格によって変化するものもあるが、中国語や日本語ではそういう語形変化や活用がない。また、名詞は文表現の意味の中心の役割を果たしている。名詞が文表現の意味の中心であって、しかも文法的配慮があまりいらぬということは、新しい意味の受容や新造にとって大変便利である。しかも、意味がよくわからないでも盛んに使われる傾向がある。こういう傾向は中国語における漢字にも実は責任がある。中国は歴史上も異民族国家であって、異言語の人々が交流する機会が多く、その人たちのコミュニケーションで漢字という文字の果たす役割が大きかったと同書において指摘している。

また「文章読本」で谷崎潤一郎は中国語の動詞の豊かさをつぎのように語る⁶。

支那で日本語の「まはる」もしくは「めぐる」に當る語を求めれば、轉、旋、繞、環、巡、周、運、回、循等、實にその數が多いのでありまして、皆幾らかづつ意味が違ふ。(中略)又櫻の花の咲いてゐる花やかな感じを云ふにも、日本語では「花やかな」と云ふ形容詞しか思ひ出せませんが、漢語を使つてよいとなれば、爛漫、燦爛、燦然、繚乱等、まだ幾らでもあるであります。さればわれわれは「旋轉する」「運行する」等の如く漢語の下へ「為る」と云ふ言葉を結び着けて澤山の動詞を造り、「爛漫な」「爛漫たる」「爛漫として」等の如く「な」や「たる」や「として」と結び着けて無數の形容詞や副詞を作り、國語の

⁵ 柳父章 2004『近代日本語の思想』法政大学出版局 P184-186

⁶ 谷崎潤一郎 1983 『谷崎潤一郎全集』第二十一卷「文章読本」中央公論社 P117

語彙の乏しいのを補って来たのでありまして、此の點で我等が漢語に負ふところが多大であります。然るに今日では、いかに漢語の語彙が豊富でも、もうそれだけでは間に合はなくなりました。

3.2 黄憲堂「漢語の形態的考察——動詞を中心に——」

黄憲堂先生が1982年、東京大学大学院国語学研究室に在籍していたが、淡江大学日本語文学系主任教授陳伯陶先生の招きにより帰国し、淡江大学日本語文学系にて教鞭をとるようになった。「漢語の形態的考察——動詞を中心に——」⁷という論文は帰国二年後、『淡江學報』に投稿された論文である。

黄憲堂先生はこの論文において、漢語動詞を字数別に分けて分析を行い、特に、借用語としての造語成分に注目されながら、日本語として使われる漢語の特徴を指摘される。中に、漢字音の発音が借用段階での働きが大きい。一字漢語動詞の漢字音の入声音尾が促音になることがその一つである。つぎに引用する。

日本語の中の漢語は、借用歴史が長く使用頻度も高いため、外来語としてのイメージが薄い。中には、中国語の単語をそのまま導入したのではなく、漢字を造語成分として新たに作った語もかなりあるが、これも漢語として扱う。いずれにしても、本来異質なものの漢語を日本文法の体系の中に嵌め込むのだから、形態論的な(morphological)面に於いては無理がある。品詞別によって程度の差はあるが、日本語文法への非順応性を解消するには、色々な手を加えざるをえない。例えば、動詞と形容詞の場合は、時制などを表わす活用語尾に近いものを付け加えなければならない。

(中略)

⁷黄憲堂 1984 「漢語の形態的考察——動詞を中心に——」『淡江學報』第21期 P251-266

airiti

「接する」「達する」「察する」などに見られるように、漢字音の入声音尾が促音になる。これらを二字漢語動詞の場合と比べれば、その違いがはっきりする。

セツする（接）—めんせつする（面接）

たツする（達）—とうたつする（到達）

さツする（察）—かんさつする（観察）

このような促音化は単語熟成に連がっていると言えよう。なお、二つの漢字音の結合の場合、例えば、

セツたい（接待）

たツせい（達成）

さツち（察知）

など、二つの造語成分が強く結合して、「接する」などのように先行した漢字音の音尾が促音化し、全体で一語となっている。

（中略）

漢語動詞を字数別に分けて見て来たが、その中で、もっとも代表的なものは二字漢語であろう。一字漢語動詞は特殊なものであり、その字音部は二字漢語の造語成分にもなるから、ある意味で二字漢語動詞の一つ前の段階の動詞とも言える。

三字以上のものは、二字漢語の抽出ができるから、その延長的存在でもある。漢語動詞の字音部（特にその典型たる二字漢語）は、借用語としての段階では、ほとんど体言の意味で取り入れたのだが、その動詞としての性格が無視できないため、体・用言の兼用法が多い。そういう二重人格的な漢語は、日本語の深处まで侵入し、かなり異例な働きも許されている。

例えば、「平将門を追討」、「台湾へ一時帰国」のような謂ゆる「準体言」の用法があるだけでなく、「礼！」「起立！」など、号令として使われ、和語動詞命令形に相当するものもある。また、「頂戴！」「要注意！」のように、命令希求の用法まで発展した。

4. 日本語の中の台湾語

台湾はかつて日本の植民地であったから、台湾語には日本語と似ている発音が多いといった誤解をよく耳にする。結論からいえば、台湾語は古代中国語のままの発音が多いためである。第 68 回（2015 年 5 月 24 日）カンヌ映画祭で、台湾の監督侯孝賢（ホウ・シャオシェン）が「刺客聶隱娘」（日本訳『黒衣の刺客』）によって監督賞を受賞した。映画「刺客聶隱娘」は中国の漢代を舞台にした武侠アクション映画である。『聯合報』の報道によると、侯孝賢監督が台湾語の吹き替えを計画していたが、時間的に間に合わなかったため、諦めることにしたとのことである⁸。

4.1 台湾語の声調変化

現代中国語は古代中国語の「入声」を欠落しているため、「入声」を使用する台湾口語の発音の研究は貴重なものである。「台湾語の声調変化」⁹は黄憲堂先生が東京大学大学院国語学研究室に在籍していたころに書かれた論文で、論文の冒頭をつぎに引用する。

本稿で言う台湾語とは現在、台湾で使われている閩南語（福建南部の方言）を指す。この方言は、言語学者の間では福建語や閩南語と言われているが、本土の福建語から数世紀も断絶して語彙や音声面の違いがだんだん大きくなってきたため、ここでは敢えて「台湾語」と呼ぶ。中国語は声調言語 (tone language) としてよく知られているが、なかでも南中国語は特に多くの声調変化が対立をなしており、台湾語もこの南中国の一方言である。

台湾語には興味深い声調変化がみとめられるが、これまでそ

⁸ 『聯合報』の記者項貽斐の 2015 年 7 月 16 日の記事「聶隱娘掌聲如雷」によったものである。記事では「侯導本想將全片以漢語，也就是古典的閩南語重新配音，可惜來不及而作罷。」と侯孝賢監督の説明が述べられている。

⁹ 黄憲堂 1981 「台湾語の声調変化」『言語学演習' 81』（東京大学文学部言語学研究室 P163-173）

れに関する研究は、事実の指摘・記述も、またその説明・解釈も十分なものではなかった。本稿は特に特色のある幾つかの声調変化現象について、新たに幾つかの事実を指摘して説明を加え、また、すでに指摘されている事実に対しても説明・解釈を試みようとするものである。

4.2 台湾語で『論語』『孟子』を解釈する

『愛説台語五千年 To understand the beauty of Taiwanese—台語聲韻之美』¹⁰において、王華南は台湾語の音韻の美しさについて考察する。また、台湾語が現代の中国語の源という側面を『論語』『孟子』といった古典の書籍より立証する。

同書によれば、台湾語のルーツは西晋末年「五胡乱華」の時期、北方の漢人が南下し、中原地区の人口の六分の一を占めていたことである。その一部が閩地に移住した。その後閩南の人々が台湾に渡来したのである。史書の記載によると、第一代目の漳州刺史陳元光が「河洛」付近の「光州固始」出身であることで、閩南語は河洛語とも言われる。

第二章「孔子に台湾語を教えてもらおう（孔子教你説台語）」の实例を取り上げる。

实例 1 「論語公冶長篇」

孟武伯問：「子路仁乎？」子曰：「不知也。」

「不知也」，即台語之口語：【**m̄-chāi-iáñ**】，ㄇㄟˇㄔㄞㄞㄢˊ
 一ㄩˇ、】真的不知道。「不」在台語發【m̄，ㄇㄟ】的音，而吳音、客家話、廣東話也都發【m̄，ㄇㄟ】音、這都是源於商代最古老的漢語。

¹⁰王華南 2007『愛説台語五千年 To understand the beauty of Taiwanese—台語聲韻之美』高談文化 P15-17, P44-49

airiti

「不」という漢字の発音は時代によって三どおりの発音があげられる。上古音（商の時代）は台湾語の口語に近い。中古音（商の時代から漢唐まで）は台湾語の文語に近い。北京語（宋、元の時代から現在まで）は華語、普通話に近い。

実例2 『孟子』梁恵王篇（三）

梁恵王曰：「寡人之於國也，盡心焉耳矣！」

整句話用台語標音：

【kuañ-jîn che î kōk à, chin-sim an-ne ih

， 《ムメヱ

リ、ゝ、ー、ノ、アセー、ノ、《コ》、ヱ、リ、ム、ー、ノ、ヲ
ろせー、ノ、】「焉」在北京話發「ian」（一ヲ）、中古音發「ien」

（一せら）、上古音發「an」（ヲ）、《廣韻》：「焉，安也」所以

「焉耳」也就寫做「安爾」。台語：「就是安爾」，就是如此、就是這樣。

王華南の考察によれば、日本語の「あ、い、う、お、か、き、く、け、せ、そ、た、ち、つ、て、と、な、に、ね、も、や」の22個の平仮名の発音は台湾漢字の発音と一致している。日本語の「え、こ、さ、し、す、ぬ、の、は、ひ、ふ、へ、ほ、ま、み、む、め、よ、ら、ろ、れ」の20個の平仮名の発音は台湾漢字の発音と近似している。

5. 西欧文化の導入と和製漢語

5.1 和製漢語の形成

8世紀から19世紀江戸末期までの和製漢語の数はそれほど多くはなかった。佐藤武義の『和製漢語一覽』に8世紀から19世紀中期までの和製漢語636個が掲載されている。「火事」「大根」「立腹」といった訓読から転じた和製漢語のほか、日本独特の概念を表わす

漢語「芸者」「縁談」「厄介」「細工」「三味線」などがとりあげられる。周知のとおり、日本の近代の啓蒙期は西洋の文化を大量的に翻訳することによっての時代と言える。かつて漢語の借用を通しての開化を成し遂げた日本の文化は近代化の過程においては西洋の制度を翻訳によって導入し、その文明開化を迎えたのである。

『翻訳語成立事情』¹¹では「社会」「個人」「近代」「美」「恋愛」「存在」「自然」「権利」「自由」「彼、彼女」といった10個の翻訳語を10章にわたって検証した。最初に取り上げられた翻訳語は「社会」である。第1章の副題に「societyを持たない人々の翻訳法」という一言から、明治の知識人の苦闘ぶりを覗かせてくれる。「society」またこれに相当する西欧語の日本語への翻訳の歴史が語られる。柳父章の詳しい説明をもとに、翻訳語「社会」の歴史をつぎの表にまとめておく。

年代	出所	原文	訳語
1796 (寛政八年)	蘭和辞書 『波留麻和解』	genootschap	交ル、集ル
1814 (文化11年)	英和辞書『語厄利 亜語林大成』	society	侶伴、ソウバン
1847-48	『英華字典』	society	会、結社
1855-58 (安政2-5年)	『和蘭字彙』	genootschap	寄合又集会
1862 (文久2年)	『英和对訳袖珍 辞書』	society	仲間、交り、一致
1864 (元治元年)	『仏語明要』	societe	仲間、懇、交り
1867	『和英語林集成』	society	Nakama, kumi, rennchiu

¹¹柳父章 1982『翻訳語成立事情』岩波新書

(慶応3年)			, shachiu (仲間、組、連中、社中)
1868 (慶応4年)	『西洋事情外編』	society	人間交際、交、国、世人
1872 (明治5年)	『自由之理』	society	政府、仲間連中即ち政府、世俗、仲間、人民ノ会社即ち政府ヲ言フ
1873 (明治6年)	『附音挿図英和字彙』	society	会、会社、連衆、交際、合同、社友
1874 (明治7年)	『明六雑誌』第二号、西周「非学者職分論」	society	社会
1875 (明治8年)	『明六雑誌』第三十号、森有礼	society	社会（会社の意味として使われる言葉）
1876 (明治9年)	『学問のすすめ』	society	社会

(柳父章『翻訳語成立事情』岩波新書 1982年 P3-22 により作表したものである。)

注目したいのは 1847-48 年に、『英華字典』にある society の訳語「会、結社」である。また、1868 年の『西洋事情外編』の訳語「人間交際、交、国、世人」と 1876 年『学問のすすめ』の訳語「社会」との間に、society の訳語が定着したと見られる。

ちなみに、西欧文化を翻訳する際に、中国人の訳語と日本人の訳語のうち、日本人の訳語が中国語として定着したことが多い。例えば、evolution の和製漢語は「進化」で、嚴復の訳は「天演」であった。capital の訳語に「資本—母財」の違いで、philosophy の訳語に、「哲学—理学」の違いで、science の訳語に「科学—賽因斯」の違いがあった。多くの訳語のうち和製漢語が中国語として使用されるようになったが、例外もあった。logic の和製漢語が「論理」

で、嚴復の訳は「邏輯」であった。「邏輯」が中国語として定着したのである。

5.2 和製漢語についての研究

和製漢語についての中国での研究は百花繚乱といえる。金学哲「和制汉语的形成及其对汉字文化圈其他语言的影响」¹²にあげられた研究書籍をつぎにまとめておく。

- 高名凱・劉正琰『現代外来詞研究』（1958、459語収録）
 王立達『現代漢語從日語借来的語彙』（1958、589語収録）
 鄭奠『談現代漢語中的「日語語彙」』（1958）
 邵榮芬『評現代漢語外来詞研究』（1958）
 高名凱・劉正琰・麦永乾・史有為『漢語外来語詞典』（1984）
 沈国威『現代漢語中的日語借語研究—序說—』（1988）
 岑麒祥『漢語外来詞詞典』（1990）
 李樂毅『現代漢語外来詞統一問題』（1990）
 史有為『外来詞研究之回顧与思考』（1991）
 朱京偉『現代漢語中日語借詞的弁別和整理』（1993）
 靳学軍『現代漢語中日語借詞的產生及其伝入』（1998）
 顧江平『試析当代日語借詞对漢語的浸透』（2000）
 劉曉霞『從日語借詞看日語对漢語的影響』（2001）
 周剛・吳悦『二十年新流行的日源外来詞』（2003）
 朱瑞平『「日語漢字詞」对日漢語教学的負遷移作用例析』（2005）
 崔崑『進入中国的「和製漢語」』（2007）
 胡軍『漢語日源回帰詞研究』（2008）
 王芳『漢語中的日語借詞』（2009）

なお、中国の国家図書館と高等教育数字図書館の検索を利用し、

¹²金学哲 2013 「和制汉语的形成及其对汉字文化圈其他语言的影响」 上海外国語大学修士論文

「和製漢語」をキーワードで学位論文を検索した結果、次の修士学位論文があげられる。

- 华东方 2005 从历史变迁看和制汉语的词语构成:以二字和制汉语为中心
- 彭程 2006 近代和制汉语的产生及对汉字文化圈内其它语言的影响
- 魏亚坤 2006 “和制汉语”的形成与发展:从近代中日词汇交流史角度分析
- 徐程成 2006 近代三字和制汉语词的结构分析
- 涂雅倩 2008 明治维新前后日本「和製漢語」的形成与发展
- 金学哲 2013 和制汉语的形成及其对汉字文化圈其他语言的影响
- 张小琴 2014 关于和制汉语的逆向输入与接受关系的研究

6. 台湾にある日本語

6.1 台湾の言葉となった日本語

『台湾に生きている「日本」』¹³の第三部「台湾の言葉となった日本語」の最後に、「台湾の言葉となった日本語辞典」が添付される。言葉数は179個で、つぎに二、三とりあげる。

【アゲ 揚げ 台湾語ほか】漢字では当て字で「阿給」と表記する。

【アルミ ホーロー鍋 客家語】新竹・苗栗地方の客家語に残っている日本語。アルミとはいってもホーロー鍋を示している。

【イチバン 一番 台湾語ほか】定着度が高く、もはや台湾の言葉になっている。漢字での表記は「一級棒(イーチャーバン)」。

【オンシン 温泉 パイワン語】パイワン族の村々で耳にする言葉。

6.2 台湾にある日本語からの借用語

¹³片倉佳史 2009『台湾に生きている「日本」』祥伝社 P247-296

台湾の大学で日本語からの借用語の研究に関する修士論文をつぎにリストする。

- 朱曉雲 1986 東吳大學『中国語の外来語：日本語から借用したものを中心に』
- 呂昭慧 1999 中国文化大学『現代漢語新詞語料的整理與研究』
- 許斐絢 2000 國立台灣師範大學『台灣當代國語新詞探微』
- 王国齡 2003 『台灣中文詞彙之新日語借語研究～日本流行文化影響之下產生的新借詞』
- 陳錦怡 2003 銘傳大學『流行語となった新語に関する考察-付・日本語と関連のある中国語』
- 李知沅 2004 国立政治大学『現代和語外來詞的研究』
- 林思怡 2005 東吳大学『日台外来語についての一考察～変貌と受容を中心に』
- 黄美娥 2006 国立高雄第一科技大学『日本外来語研究～以外来語充斥之社會現象為主』
- 陳美瑛 2006 輔仁大學『大學生使用「新日語借詞」之態度與接受度-以輔仁大學學生為例-』
- 陳俊丞 2007 輔仁大學『日本文化影響下之外來語考察～以台湾國語語彙為主』
- 方逸珮 2010 輔仁大學『台灣日語外來流行新詞之演變與融入』
 (淡江大学 103 年度修士課程構想発表 2014 年 11 月 21 日の林秀麗「台湾における日本伝来の新語に関する研究」の資料により補充したものである。)

上記方逸珮の 2010 年提出した論文では、2008 年の中国時報、自由時報、聯合報三社の電子新聞を利用し、72 語に対して使用数を検索した。多い順であげると、「人氣(2034)、料理(1876)、達人(1218)、泡湯(719)、宅男(515)、少子化(514)、福袋(443)、看板(415)、...、花火(96)、素人(93)、高校(88)、物語(75)、均一(75)、純愛(67)、...、

新發賣(2)、豚骨(2)、番外篇(2)、有料(2)、花見(1)」といった言葉があげられる。

7. 翻訳と日本語教育

台湾の日本語教育では一時期ダイレクトメソッドが流行っていたが、近年翻訳の力が重要視されるようになった。翻訳の効果的な使用は日本語の力を実務的に結びつけていくきっかけと言えよう。

『翻訳研究のキーワード』¹⁴によれば、ダイレクトメソッドが提唱された背景には、19世紀以来アメリカへの移住により、言語をコミュニケーションツールとして使える能力を急いで身に付ける実用講座への要求が高まったからである。また英語圏の語学学校では、観光客や移民のための授業を提供することになったが、学習者の母語が異なるため翻訳が不可能となった。このような学校の典型的な語学教師は英語母語話者であり、ダイレクトメソッド教育の専門知識を備えてはいるが、学習者の第一言語の運用能力をもっていることはめったにない。

近年、語学学習における翻訳の役割について再評価が始まり、多くの研究者たちは教室から翻訳を追放してきたことについて疑念を表明している。こうして拒絶が行き過ぎであったことが認識され、便宜上の理由（新しい語彙を説明するのに最も効率のよい方法であるということ）のみならず、理論的に正当化された学習支援の方法としても、翻訳が再び取り入れられ始めている。この再評価を裏付ける要因も少なくない。優れた翻訳実習は、多くの学習者にとって、単にTLに熟達する手段というより、それ自体が目的ともなりうるものである。政治的理由から、学校の二言語あるいは多言語使用の実践を奨励する傾向も強く、ダイレクトメソッドのように、英語だけが排他的に使われる、単一言語使用の状況はもはや想定できない。ネイティブスピーカーが常に最良の語学教師であるという考えが、偏った不合理なものであるとの批評もなされ、また、翻訳には形式

¹⁴藤濤文子監修編訳 2013『翻訳研究のキーワード』研究社 P81-86

的等価をはるかに超えた多くの面があるとの認識もなされている。翻訳を効果的に使用方法の開発が重要である。翻訳を使用することでズレを発見して、言語や文化の特徴を学ぶこともできる。

一方、近年言語機能を考慮に入れる日本語教育が望まれている。1970年代ライスは言語機能をテキスト・タイプと翻訳方略に結びつける。ライスはビューラーの言語機能に関する三分類の叙述機能、表出機能、訴え機能を援用し、テキストが使用されているコミュニケーションの状況に結びつけた。そこで、「情報型テキスト」「表現型テキスト」「効力型テキスト」¹⁵と分類される。言語の特性からいえば、それぞれ論理的、審美的、対話的に分けている。翻訳方法として、「情報型テキスト」には適宜、明示化が重要視されるし、「表現型テキスト」では原著者の観点を採用することで、「効力型テキスト」では等価効果を大切にすることである。

ライスの研究は、翻訳理論が単なる単語という小さな言語単位の考察を超え、さらに単語が生み出す効果さえも超えて、翻訳に関するコミュニケーションの目的を考察しようとする。

日本語教育では、学生に日本語の本文を理解してもらうことを前提としているが、訳すことによるコミュニケーション能力も無視できない力である。訳出文の等価効果を狙う効力型テキストの表現力が日本語学習の視野に入れるべきである。

8. おわりに

翻訳語の魅力はその斬新さ、また、清新さにある。自国にないものを受け入れる過程に、翻訳はさけられない問題である。

日本語は古代中国語の録音機といわれる。そうした観点からいえば、台湾語は古代中国語の面影といえよう。また、近年台湾での日本語を借用した現象に、「硬訳」を主張した魯迅だったら、喜んでみているだろう。

¹⁵ジェレミー・マンデイ著鳥飼玖美子監訳 2012『翻訳学入門』みすず書房 2刷 P111-114

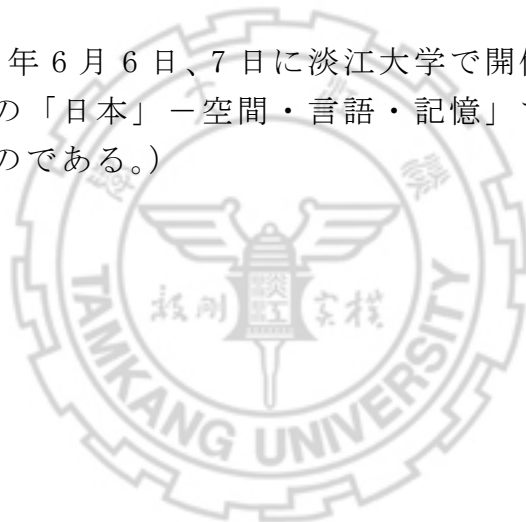
airiti

日本語教育に携わっている一教師として、漢語を共有している台湾語、日本語、中国語を視野にいれながらの授業をすすめたいものである。なお、下記の二点を今後の課題とさせていただきたい。

- 1 台湾で使用される日本語から借用した新語の推移
- 2 同じく中国語を使っている台湾と中国との文体の違いを日本語の中国訳本をとおして捉えたい。

最後に、今年四月までに台湾、中国から日本に移動する観光客はそれぞれ過去最多の人数を記録した。交流が盛んである中、漢語をとおしての相互理解に期待している。

(本論文は 2015 年 6 月 6 日、7 日に淡江大学で開催されたシンポジウム「移動の中の「日本」—空間・言語・記憶」での口頭発表を加筆・修正したものである。)



※2015 年 12 月 30 日受理